

<h1 style="font-size: 2em; margin: 0;">小 さ き 声</h1>	No.181 1977.9.20 〒 189 東京都東村山市青葉町 4-1-10 多磨全生園 松本馨
---	---

## 終末論的希望

(1)

福音書には、世の終りの審判についてイエスの予言が記されている。これは死を前にしてのイエスの予言であるがそれだけにその内容は異常で、正常な心では理解しにくい。マタイ 24 章の世の終りの審判を、誰がそのまま信ずることが出来るだろうか。しかもイエスの予言は外れたとも言われている。それだけに一層理解しにくいグロテスクな内容を持っているのである。

然しその内容がグロテスクであっても世の終りが迫っていると考えたイエスの予言が外れたとしても、この世界が終りの日に審かれるであろうこと、即ち、キリストによるこの世界の支配が完成するということが、真実であり、それを否定することは出来ない。

キリストの来臨を否定することは内村先生が言われているように、十字架と復活を否定することである。

世の終りについては、それがどのような形で来るのか、亦いつ来るのか誰もその日その時を知る者はいない。子も知らず、唯父のみ知り給う。それ故に、聖書はいろいろな形で世の終りを語っている。その代表的なものはヨハネ黙示録である。然し、その内容について、それをそのまま信ずることには抵抗を感じる。

唯一つ、ヨハネ黙示録の中で理解可能なもの、リアルなものとして受け取ることが出来るものは、神の子羊に十字架を見ることである。福音書の、イエスの世の終りの審判についても、審判者たる人の子に十字架を見る時、それは現実の出来事として受け取られるのである。それ故に十字架をはなれてキリストの来臨はないし、審判もない。天の万軍を引卒いて地上に降り給う人の子に十字架を見る事が出来なければ、それは夢幻であり私達と何のかかわりもない。然し、人の子と十字架が重なる時、世の終りは現実の問題であり、審判もまた現実の出来事なのである。

それ故にキリストの来臨を語るとき、十字架とかかわりなしに語ることは私には出来ない。再臨運動が教会の厳しい批判を受け、反対されたのは、再臨運動に十字架が欠落していたためではないだろうか。再臨運動が現実と遊離し、星占いのものになってしまうのは、十字架が欠落しているためである。戦時中そして戦後、日本では再臨運動が起つたが、その中には必ず星占いの予言者が起り、何年何月何日にキリストが来ると予言した。そうした言葉を信じた者は、この世とのかかわりを断ち、ひたすらその時を待つた。つまり、現実に対して責任を負わない、家族に対して、社会に対して、政治に対して責任を取ろうとしない。キリス

ト来臨の前に、それらは無意味なものとなってしまうのである。再臨運動にはこうした現実に対して責任をとろうとしない姿勢が多少にかかわらずある。再臨運動が非難されるのは、これがためである。内村先生の再臨運動は、こうした弊害はなかったように見えるが、その危険を孕んでいたものと思われる。或いは先生の再臨運動に信じた者の中には、家族を捨て、社会を捨てた者はいなかったであろうか。

内村先生の再臨運動は、戦争反対の平和に徹した内村先生が、第 1 次大戦の世界に絶望し、真の平和は、戦争なき世界は、キリストの来臨以外にないと信じたためではないだろうか。先生の再臨運動は第 1 次大戦の唯中で起っているのである。再臨運動が現実との緊張関係を絶ち、思考を絶つのと相違して、第 1 次大戦という現実との緊張関係から起っていることは注目してよいと思う。

然らば現代の再臨運動は現実とのいかなる緊張関係において起るのだろうか。

2 代目の先生の中に、再臨運動を起した者が 1 人もいない事は不思議である。そのよしあしは別として、起らなかった原因の一つは、「敗戦の神義論」が指摘しているように、内村先生が戦争に反対し、第 1 次大戦という現実の厳しい緊張関係に立たされていたのに対して、2 代目の先生の中には 15 年戦争という厳しい現実の緊張関係の外に立たされていた者があったように思われる。若しも内村先生がとられたように、戦争に反対し、平和に徹したならば、現実との厳しい緊張関係から、弟子の中から 1 人位は再臨運動に立ち上がる者があったのではないだろうか。

現代は神なき世界であり、混迷と頹廢の世界であり、世の終りが来たのではないかと思われる程に神なき世界であり、このような状況の中で再臨運動が起らないのは現実との緊張関係が欠落しているためではないか、神による支配を心から待望していないためではないのか。いかにして現実との緊張関係に立つことが出来るのか、それは、この世界が十字架によって審かれていること、亦同時に贖われていることを十字架のイエスにおいて示されることである。即ち、十字架に固着する時、現実との緊張関係にいれられるのである。その緊張関係から再臨への希望が大きく生れる。そしてその再臨は、十字架による再臨であり、十字架をばなれて再臨はない。この十字架による再臨の期待は、現実に対しての緊張関係に入らしめ、家族に対して、社会に対して、政治に対して責任を負うのである。それ故に十字架による再臨運動は、この世に対して最も積極的に責任を果すのである。終末論的希望とはこの意味で、この世に対して誰よりも積極的に肯定し、愛し労働するものである。

(2)

「聖書の研究」1919年2月号に「万人に関わる大いなる福音」という文章が掲載されている。これは大阪で開かれた「キリスト再臨研究大会」の講演の要旨である。この文章を読む時、戦争に反対し、平和を翼求した先生が、第 1 次大戦に絶望し、キリスト再臨に走った内的経過がうかがわれる。この文章の中で先生は次のようなことを言われている。「キリスト再臨は、ただにキリスト信者に関わる問題ではない。世界万民に関わる問題である。国という国、人と

いう人にして、この問題に対して深き興味を持たざる者ではない筈である。戦争絶対的廃止に関わる問題である。更に進んで人生の総ての悲哀、総ての苦痛、然り、死そのものの廃止に関わる問題である。」又次のようにも言っている。「今や全世界の注意をひくものは、大統領ウィルソンの提出にかかる国際連盟問題である。人類の利害、休戦に関する大問題であるからである。然し乍らその重大の程度においては、キリスト再臨は国際連盟の比にあらざるは言うまでもない。連盟は戦争防止にとどまる。されども再臨は戦争の根本的廃止をもち来たすのである。」

国際連盟は、第1次大戦終了後、世界の恒久平和をのぞむ人達によって作られたのであるが、先生は第1次大戦を通し人間の罪の深さを知らされ、キリスト再臨以外に戦争の絶対廃止、恒久平和のない事を鋭く指摘しているのである。その後の歴史が先生の指摘した通り第2次大戦をうんだ。先生は正に日本における予言者としての役割を果たしている。

先生は再臨運動を「運動」と呼ばないで「研究大会」と呼んでいる。再臨運動の熱狂的狂信的に走ることを恐れ、「研究大会」と呼んだのであろうか。私は先生の「キリスト再臨研究大会」に心ひかれ乍らも、再臨運動には疑問を持つ。再臨はあくまでも神の秘義に関わる事である。イエス御自身が言われているように、その日その時を知るものはない。子も知らず、唯父のみ知り給う事である。この意味で再臨は、人間の側の想像や予測をゆるさないものであり、そこには絶対的とも言うべき断絶がある。再臨運動や研究大会にはこの断絶を側の熱心によって越えようとす

るものがないだろうか。神の側の出来事を人間の側の出来事にしようとする恐れはないだろうか。

又この世界の諸問題に対する義務と責任を回避し、再臨に帰してはいないか。再臨運動が世界の諸問題の根源的解決であり、義務と責任を果す事であるとしていないか。内村先生の「キリスト再臨研究大会」の講演の要旨からは、そのようなものは微塵も感じられないが、受ける側は必ずしも先生のような受け止め方をしたとは限らない。

私は、キリストの再臨は大会や運動によって広めるものではなく、あくまでも十字架による約束の言葉として宣教すべきものであると信ずる。この意味で再臨を語る事は十字架を語る事である。十字架にある義とは、私達の救いを約束したものであり、その約束とは十字架による罪の赦しであり、罪の赦しとは世の終りの日、即ちキリストによる世界の審判の日に神の国に入れられる事である。それ故に十字架による罪の赦しと救いとは世の終りの日のキリスト来臨を指すものである。十字架に固着する事はキリストの復活と再臨に固着することである。キリストは蔑しい下僕の形をとって、この世に来られ、私達と全く同じ試みに会わされ、虐げられ、苦しめられ、十字架の死にまでくだって行かれた。イエスは、荒野でサタンに「汝神の子ならば、この石に命じてパンとせよ」と試みられた時、神の子の権威をもちいずあくまでも人の位置に立たれた。ゲツセマネで捉えられた時も、神の子の権威をもちいず、人として捉えられ、十字架の極刑に処せられた。「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マルコ

15:34)

神の子が、人間のどん底に下った姿であり、人となられた極限である。この人となられた、ということは、取税人、罪人、病人、貧しい者、この世における最も不幸な人の位置に立たれたことである。その1人1人の中に入られたことを意味する。それ故に、これ等の人を受くることはイエスを受くることである。十字架に固着することは、イエスと共にこれ等貧しき人に仕えることなのである。そして其処に復活と再臨への大きな希望とよろこびが与えられるのである。

十字架なき再臨はないし、再臨なき十字架もない。

## ある友へ

8月17日

自治会の仕事をやめて福音宣教に専念することをのぞみますとの御言葉有難う御座居ます。けれども、私は福音宣教と自治会の仕事を全く別のものというふうにはとらえていません。本誌の内容を読んで頂ければ分る通り、本誌は自治会活動と無縁ではありません。本誌の福音宣教は、自治活動にかかわり自治活動は福音にかかわっています。どちらか一方では本誌は形をなさないのです。然し、いつかは自治活動をやめる時が来るでしょうが、そのことが、より宣教にかかわるとは考えてはいません。やめることも継続することも信仰より出ずることであり、信仰をはなれて世俗とのかかわりはないからです。

自治会活動を始めてから9年になります。恐らく自治会の歴史の中で、9年間連続役員をしているのは

私くらいでありましょう。そのためでしょうか、何人かの知人より自治会をやめて、本来の仕事に専念するようにとすすめられます。私のことを心配してすすめてくれる人は、過去に自治会活動をした人達であり、自治会活動からプラスになるものは何もない事、それ故に早い機会に、即ち、老人となる前にやめて、自分の仕事をせよと言うのです。自分の仕事とは、あなたの言われるように、福音宣教をせよ、ということなのです。

たとえ私が自治会から身を引く事に依って自治会が閉鎖されるような事態になってもやめるべきである、困れば誰かが引き受けるだろうし、引き受ける者がいないにしてもやめた方がよい。自治会活動からは得るものは何もない。犠牲になるだけだと言うのです。私のことを心配して、自治会から身を引くようにとすすめてくれる人達は皆、上記のような考えをもっています。若しも私が自治活動を自己の利益のために、即ち自治活動に自己の生き甲斐亦は何等かの意義を求めて従事しているとすれば、私に勧告して呉れた人達と同じ考えを持つでしょう。自治会活動程、自己にとって無益なもの、失うものが多くて得るものが全くない仕事は他に見出せないからです。然し、私は自治会活動に何ものをも求めてはおりません。ここでいう求めているないということは、生きるための意義、価値、目的、或いは仕合せというものを求めているないということです。自治活動は大衆の為に一方的に仕えることであり大衆の下僕になることです。それは大衆に仕えること、下僕になる事に生き甲斐を見出したり、人生の意義を見出しているからでは



なく、ただ仕え、下僕になっていることです。自己が無になり下僕として仕えていることなのです。そしてこれは信仰から出ているのです。

1950年春、失明した時、私は信仰をなくし、人生の意義を見失ってしまいました。生きながら死に渡されてしまったのです。その私に生命を与えて下さったのは回心によ生ける神、キリストとの出会いでした。

失明によって肉なる私は暗黒の中にとじこめられてしまったのですが、回心によって霊なる私は光のとりことなってしまったのです。その光の中で見たものはイエスの十字架であります。神の子キリストが、賤しい下僕の形をとって十字架の死にまで下り世の罪を贖われたという事実です。この事実、即ち、十字架という出来事に合わされ、イエスと共に肉なる自己が十字架にかけられ、イエスの生命に入れられた時、世界は全く一変したのです。神なきこの世界が、キリストの血によって贖われ、聖別されているのです。それ故にこの世のいかなる仕事もキリスト者にとって可能になったということです。

十字架によって聖別されている世の諸々の職業に対して、キリスト者は積極的に、大胆に入ってゆくことが可能になったという事です。そのかわり方は神の子キリストが賤しい下僕となって万人に仕えたように、即ち、十字架の死に下って行かれたように己れの救いを放棄しイエスと共に十字架にかけ、万人に仕えるという信仰によって、世の諸々の職業にかかわることです。それは神を愛し、隣人を変ずることでありましょう。'十字架には神の愛と隣人への愛があります。私達が、世の貧しい者、病んでいる者、苦しんでいる者、

虐げられている者に仕えることは、十字架のイエスを受け入れる事であり、イエスが十字架の死に下って行かれたのは、これ等の人達の罪を御自身に受け、御自身をこれ等の人達に与えるためだったからです。十字架において彼(イエス)我(世の人)との交換が行われているのです。

それ故に私の自治活動は、十字架のイエスを知った事から起った必然の出来事なのです。自治活動のために倒れ、それに依って死ぬとも私は少しも悔いないし自治活動そのものに自己満足したり後悔したりすることもありません。十字架を知った必然の出来事として自治活動をしたにすぎないからです。たとえ自治活動のために死ぬようなことがあっても、十字架のために死ぬのです。私にとって、死ぬのはイエス・キリストの為であり、生きるも亦イエス・キリストの為である。主イエス・キリストの命じ給う所には無となり出かけて行くことでしょう。ですから私が自治会のために倒れ死ぬことがあっても、或いは失敗し大衆から追放されるような事があっても、決して悲しんだり失望しないで下さい。私にとって生きるは主の為であり、死ぬるも主の為だからです。自治活動だけではなく、この世のどんな小さな仕事に携わってもそれは同じことなのです。

8月23日

前号の「再臨」で内村先生は、平和の問題を再臨と結びつけ論じていませんが、先生の戦争反対は再臨にまで突き抜けたのだ、という意味のことを書きましたが、其の後先生は、平和の問題を論じていることを知り

ました。それが本号の「終末論的希望」であります。そして戦争に反対し、この世の平和に絶望し、再臨にまで突き抜けて行ったのだ、と言う私の言葉がうら書されたようで、大へん嬉しく思いました。然し、それと同時に、先生の再臨運動は、最後にどのような形を取ったのが興味を覚えました。私は今「聖書の研究」(1919年)を読んでいます。18年19年は、先生のいわゆる「再臨研究大会」が最高潮に達した時期ではないかと、それと共に教会の反対も亦熾烈を極めたのではないかと、という気がします。

「聖書の研究」を読み続けて行けば、どのようにして「再臨研究大会」に終止符がうたれたのか、或いは最後まで続いたのか、明らかになりませんが、その結果を見るよりも、現在の時点でいろいろと想像することに興味を覚えます。それというのも私自身がキリストの再臨を熱望し、冀求し乞うているからです。私の再臨冀求は、運動という形を取りませんし、特別に再臨だけを強調することはありません。十字架の主イエス・キリストを語ることが再臨を語ることだからです。再臨のない十字架は無意味であり、亦、十字架のない再臨も意味がありません。何故ならば、十字架による約束は、キリストの来臨に依って完成することであり、其処にこそ私達の最後の希望があるからです。」

然し、キリストに依る支配とは、どういうものであろうか。戦争もなく、病気もなく、不安、苦痛、諸々の悲哀もなく春の野に行くような世界なのであろうか。死も悲しみもない歓喜の世界なのであろうか。私は、キリストの来臨を冀求するものです

が、その世界がどのような世界であるかについては、全く関心がありません。その世界が、聖書で比喩的に言われているような天国であっても、地獄であっても私にとってはどうでもよいことなのです。十字架の主イエス・キリストが共にいます、ということだけが、私の最初にして最後ののぞみなのです。主イエス・キリストが地獄に下り給うならば共に行くだけのことです。それが救いなのか、亡びなのか、私にとってそれはどうでもよいことなのです。

この地上において、私のなすべきことは、キリストが来り給う日まで、その歩まれた十字架の道を歩くだけです。十字架の道、それは神の子の權威を放棄し、取税人、罪人、寡婦、孤児、癩病人、盲人の位置に立たれたイエス、この世の誰よりも低く、誰よりも弱く、誰よりも無力となって十字架の死にまで下って行かれたイエス、万人に仕えるイエスに従うことです。私の名に由ってこれらのいとちいさきものの1人にしたことは、私にしたことである、と言われたイエスに従うことです。その従うとは、これら弱き者、病める者、貧しき者、悩める者に仕えることです。それが生けるキリスト、十字架の主イエス・キリストを受けることなのです。そして、そこがキリストの支配し給う所、神の国なのです。それ故に現在とキリストの来臨に依るこの世の支配は本質において少しも異なるところがありません。主イエスの十字架を烈しく求めることは、キリストの再臨を烈しく求めることであり、この世の貧しき者、病める者、弱き者を烈しく求めることでもあります。其処では、信仰とこの世との区別はなく、この世に仕えることがそのま

ま信仰であります。

神が一人子を給う程に世を愛された世とは、キリストの血に依って贖われ、聖別された世であります。この世に仕えることは、そのままキリストに仕えることであり、聖とされることでありましょう。それ故に私達は、この世に対して、自由に、積極的に関わる事が出来るのです。この世に関わるとは、イエスが御自身(神の子)を放棄し、無となられたように、私達もイエスにあって、彼と共に死に、無となっているが故に、この世に対して全く自由となり、関わる事が出来るからです。

## 療養通信

8月には自治会も夏休のような形で、あまり動きがありませんでしたが、その中で、11月初旬の本省向け全患協行動に合わせ、医療研究会を開催し討議しました。この研究会で、ハンセン病療養所に何故医師が就職を希望しないのか、医師確保のためにいかなる対策を取ればよいか为中心になりました。

全国13園のうちで、30代の若い医師がいるのは全生園だけで、3人の医師からこの問題についての考えをききました。最初の1人、Aとしますが、Aは病棟で懇談したために、私は出席しませんでした。BとCは自治会事務所で懇談しましたので出席しました。

Bは基本治療科(皮膚科)の最も若い先生で、Bは、療養所の将来については一般総合病院で治療が受けられるようにする事、ハンセン病だからと言って特別扱いをする必要はない。大学ではハンセン病について教えないが、皮膚科で扱えばよい。分

らなければ勉強すればよいので、他にも分らない病気はいくらでもあるが、研究し克服して行くところに進歩がある。それに依って総合病院の皮膚科にハンセン病の専門医が出来るであろう。

センターについては、先ず、センター長は大学の教授を持って来る事。併任制度を採用する事。大学の教授が同時にセンターの臨床医であるのがのぞましい。併任の場合の勤務は、週2回とする。この併任制度に依って大学の各科専門医を受け入れる事が出来るだろう。この意味で、センターは大学とのつながりを考えなければならない。

センターは5階建くらいのもので建てる事。図書館、医局、研究室が包含される。特に研究室は臨床医にとって必要であり、考慮されなければならない。現在の治療棟は不備である。

B医師の考えには共感出来る面が多くありました。特に一般総合病院を将来は利用すると言う構想は共感を覚えます。そこまでに行く段階として社会復帰者に先ず医療の門戸を解放せよ、と言うのは癩予防法改正の私の持論です。

Cは外科医ですが、次のようなことを言われました。センターは必要がない。患者さんは減る一方で近い将来老人施設になると思われる。

医師対策については、何も持っていない。私自身のことを言えば、10年後にはハンセン病療養所は老人施設になり、私を必要としなくなるであろう。その時私は40才であり、将来を考える時、このままとどまるべきか、他に行くべきか、考えなければならない。まだ、どちらとも考えはまとまっていけないけれど、外科医

である私を必要としない時が来る事ははっきりしている。

青森県の松丘保養園では、患者自治会が持っている慰安会の土地を青森市に寄附し、其処に一般総合病院を建て、松丘保養園の医療を兼任して貰う運動を進めている、と言う私の言葉に、若しそのような併設が可能であれば希望が持てる。

医師確保の法策については希望がなC外科医の言葉は、現実を最もよく理解した発言と言えるでしょう。然し、それが総てとは言えません。C医官は外科医の立場から、センター無用論を説いているので、癩センターそのもの、即ちハンセン病療養所の癩の医療の最終的責任を負う、癩センターそのものを否定したとは考えられないからです。

然しC外科医の発言は、ハンセン病の将来の医療について絶望と言わないまでも非常に暗いと言ってよいでしょう。そしてそれは冷厳な事実であり、センター問題についても真剣に再検討する時が来たようです。

全患協は4ブロックにセンター設置を決議していますが、現在9000人の患者は、10年後に、その2分の1以下になるでしょう。しかもそのうちの90%、或いはそれ以上の者は菌陰性の高齢者、障害者になることを考えれば、4カ所のセンターは無用でありましょう。東西2カ所も多いくらいで、現実には1カ所も多いくらいです。何故なら、新発生患者はゼロに近く、然も入院を必要としません。10年後に癩予防法は改正され、一般病院で治療が受けられるようになるでしょう。また、そうしなければならぬし、癩予防法改正の目的は、其処におかなければなりません。こう考えてくるとき、セン

ターの必要性が稀薄になって来ますが、現状では、センター無用論は早計といえましょう。医療差別の癩予防法は現存しており、ハンセン病に対する社会の偏見の壁は厚く、解放医療とは程遠い位置におかれているからです。現状は、ハンセン病医療の最後をみるセンターは必要なのです。そのセンターの医師をいかにして確保するか、BとCの両医師が言われているように、大学教授の併任、敷地内に一般病院を併設する事、亦近接の医療機関との医療提携を積極的に進めること以外にないようです。

本年1月急逝された新井正男先生の顕彰碑を予算200万円で建立することになりました。この内100万円は新井先生未亡人より香典返しに頂いたものであり、残り100万円は入園者と職員から募金することになりました。既に募金を始めていますが、患者のみの募金が170万円を越え、200万円集まることが、确实となりました。患者から先生がいかに慕われていたか、改めて知らされた思いです。先生は眼科医として多くの失明者を開眼し、暗黒から光へと解放したのです。また人間的にも患者から慕われ信頼されていました。